

2. 武蔵野赤十字病院における職員一丸となった院内感染防止の取り組み

泉 並木 武蔵野赤十字病院院長

武蔵野赤十字病院は2類感染症指定医療機関のため、2020年1月の武漢からのチャーター便やクルーズ船の乗客の対応に当たっていた。早くから新型コロナウイルス感染症 (以下、COVID-19) への対策を取っていたことになる。したがって、患者への対応の仕方や、職員の感染防止のための対策を講じていた。infection control team (以下、ICT) が中心になって、N95マスク、防護服、フェイスシールド、手袋の着脱を、患者に接する医療従事者に指導してもらった。配膳・下膳や排尿・排便解除など、感染エリアの作業はすべて看護師が行うことで対応した。これが、後のCOVID-19感染流行に対する準備として役立った。

ゾーニング

2020年3月27日の小池百合子東京都

知事の外出自粛要請後から、COVID-19感染症患者が急増しはじめた。感染患者を受け入れる病棟を選定し、クルーズ船対応への反省を踏まえて、感染患者が1人でも入院した後だと作業員が病棟に入れないと考え、すぐにゾーニングに取り掛かった。清潔領域を決めておかないと防護服が脱げないため、感染エリアと清潔エリアを決めて、その間に壁を突貫工事で作成した (図1)。

感染防護のための備品

東京でCOVID-19感染患者が急増し、保健所から患者の入院依頼が殺到した。一気に10名以上の患者が入院したため、PCR検査や患者を診療する医師の人手が不足した。急がない手術を延期して、外科・整形外科・耳鼻科医師から構成される3名のCOVID-19診療チームを

1週間交代で当番とした。COVID-19診療チームには、ICTから自身が感染しないための防護服やN95マスク着脱訓練を受けてもらった。しかし、防護服やマスク、フェイスシールドなどは、備蓄してあったものはすぐに底をついてしまった。そのため、マスクは手術用覆布とゴム紐でバックヤード職員のものを作成した。フェイスシールドは、3Dプリンタを用いて頭の装着部分を印刷し、クリアファイルを切って作成した (図2)。

院内情報センターの立ち上げ

COVID-19感染患者に対しては、PCR検査にて陽性が偽陽性かを判定し、重症度による病棟選択をして入院病床を決める必要が出てきた。また、PCR検査のための3つの陰圧診察室の予約や、地域医師会や病院からの問い合わせに対して、情報を集約してコントロールする必要があったため、院内指令室としてCOVID-19対応センターを立ち上げ、PCR検査予約や入院病棟を決めた (図3)。

職員配置変更と感染防止

COVID-19感染患者は4、5月の2か月で61人が入院した。そのうち、9人が重症となり人工呼吸が必要になった。保健所や医師会から、PCR検体採取の依頼を1か月で260件受けたため、医師の配置を変更した。COVID-19診療チー



図1 ゾーニング用工事
ナースステーションと廊下を隔てる壁を作成した。